

# 「魔法の Wallet」プロジェクト 成果報告書

報告者氏名：岡本 崇

所属：大分県教育センター

記録日：令和2年 2月10日

キーワード：自閉症、生活支援

## 【対象者の情報】

○年 齢 46歳

## ○障害名と生活の状況

◎自閉症 障害者手帳 B2

共同生活援助（グループホーム）で月～金、自宅で土日の生活  
グループホームから職業実習として、クリーニング会社で勤務

## ○障害と困難の内容

＜性格・行動・他者とのかかわりの実態＞

- ・温厚で、親しい人との関わりを好む
- ・失敗することに非常に強い嫌悪感を持ち、困難を感じる場面や自分のこだわりのあること（パターン化した行動など）が叶わない場合、パニックになることがある。時間が経過して落ち着きを取り戻した際に、非常に強い反省と自己嫌悪感を示す
- ・買い物などで他人との関わりが必要な場面では、多少のぎこちなさはあるものの、必要最低限の会話などが可能で、関わりに困難を生じる場面は少ない
- ・機械・機器への親和性が高く、自分で操作することを好む

＜自宅での生活に関わる実態＞

- ・例えばテレビの時間・行動様式など、ある一定のパターンのある生活を好む
- ・掃除・調理などの家事の手伝いを好んで行い、小遣いをもらうことを楽しみにしている
- ・自宅での余暇時間は、ある程度自分の自由になる空間を好み、自室で自分の好きなモチーフの絵や文字を描いたり、好きな動画を YouTube で見るなどして過ごす（H30「魔法のダイアリー」実践より）

＜余暇利用・社会生活に関わる実態＞

- ・母親と一緒に商業施設での買い物などをすることを好む
- ・自分の小遣いで買い物（絵を描くためのペンなど）をすることを好む。メーカーやロットナンバーなどに強いこだわりがあり、理想のものを求めて数店舗を歩いて回ることもある。そのこと自体がストレスの元になったり、親の負担になったりすることがある
- ・母親の歩行がやや困難であることなどから、行動範囲が制限されることがある。単独での行動で困難になる場面はほとんどない。行き先など、簡単な要件を iPhone で伝えることができる（H30「魔法のダイアリー」実践より）
- ・父親・母親と一緒に自家用車に乗ってレジャー施設などを訪れることを好む。また、兄夫婦と一緒にであれば、新規の場所に行くようになっている（H30「魔法のダイアリー」実践より）



図1 文房具などに強いこだわりを示す様子

## 【活動進捗】

### ○ねらいと活動による方向性の確認状況

- ・情報機器を導入することで、インターネットを介した各種サービスを利用する方法を知り、永続的にQOLを向上する（H30「魔法のダイアリー」実践より継続）
- ・親しみやすく無理のない形で情報機器を導入することでストレスなく生活様式の利便性を向上させ、親の物理的・心理的負担を大幅に軽減する（H30「魔法のダイアリー」実践より継続）
- ・iPhoneを写真撮影のための機器として活用し、フィルムからデジタルへの移行を図り、現代の状況に応じた適応を図る
- ・本人や保護者のトラブル時に、119番への連絡や、親族、周囲への通知をする方法や手段を身につける

### ○実施期間

- ・平成30年7月～（継続中）

○実施者：岡本 崇

○対象児の関係：きょうだい（弟）

## 【活動内容と対象者の変化】

※本実践は、「H30魔法のダイアリープロジェクト」からの継続である。実践に至った経緯については、魔法のダイアリープロジェクト成果報告書を参照。

### ○活動の具体的内容

H30魔法のダイアリープロジェクトで報告した通り、本実践で最も重視したいと考えているのは、対象者と親がこれまで生活してきた軌跡である45年間の歴史に最大限の敬意を払い、その生活スタイルの維持・継続を最優先するという点である。中年期の自閉症者にとって、現在の生活とは、長い時間をかけて外界と折り合いをつけながら大切に育ててきた、変更・代替が困難な文化であり生活様式である。実際、この10年間で何度もデジタルカメラなどを使うように勧めてきても拒否感が強く、定着には至らなかった。活用するテクノロジーは変更したとしても、『親しみやすく無理のない』形で、ストレスなく生活様式の利便性を向上したい。そうすることで、本人及び親の物理的・心理的負担を大幅に軽減することが可能であろうと考える。一方で、中年期の自閉症者にとって、生活の硬直化は、さらなるこだわりの連鎖と悪循環を生む可能性がある。そこで、新規デバイスの導入と並行して、「新しい体験」を多く積むことで、視野の拡大にも努めたい。

### 実践1：ビデオ視聴デバイスとしてのiPadの導入（H30「魔法のダイアリー」実践より継続）

#### 導入した機器

- ・iPad Air
- ・Wi-Fi環境の導入（光インターネット）

好みのタイトルを再生リスト化し、再生マーカーを指で移動させながら、再生時間カウンターで好みの場面を選び出し、再生する。



プライムビデオ



YouTube

## 導入後の様子

「テレビ同様に視聴することができる」iPadは、比較的自然而合理的であったと考えられる。古い時代劇や刑事ドラマなどはAmazonプライム、コマーシャル動画などはYouTubeと使い分けられるなどできるようになった。自宅での視聴に関しては、VHSビデオからのほぼ完全な移行が見込める状況である。これまで、一方通行であるメディアの特性から、見逃した番組は再放送や特番放送、販売などをやみくもに待つ状態だった。見通しのなさからフラストレーションがたまることが多かったが、自分からコンテンツを探ることができることのよさも実感できているようである。また、YouTubeアプリのAIレコメンド機能によって、新たな動画の存在を目にすることで、これまで見ることのなかった動画コンテンツを視聴するようになった。興味が固定化しがちな対象者が、これまで視聴することのなかったコンテンツに目を向けるということは、それだけ趣味としての継続可能性が向上しているといえる

現時点（R1.9.10現在）では、週末に帰宅する自宅ではiPad、グループホームにおいてはVHSである。グループホームでは、Wi-Fiの環境などから、iPadの導入は困難である。VHSとiPadの本人なりの使い分けは本人なりに行えていることなどから、現時点では大きくは問題はないと考えている。今後、グループホームにおける導入が可能になったとしても、スムーズに移行ができると考えている。

## **実践 2-1：支援機器としての iPhone の導入**

### 導入した機器

・iPhone5S→iPhone6

### 支援機器としてのiPhone 導入

iPhone を導入することで、以下のような活用を考えた。



友達を探す



電話



カメラ



Google マップ



Safari

- ① 連絡手段の確保と、それによる単独行動ができる範囲の拡大で、対象者と親の双方の負担を軽減することができる
  - ② 「Moves」などの自動的に移動場所をロギングするアプリで、対象者がどんなことに興味があるのか、どのくらいの時間を要するのかなどの解析できるようにする
  - ③ アラート「デジタル迷子札」としての管理
  - ④ カメラアプリを利用することでフィルムカメラからの置き換えを行う
  - ⑤ 母親も iPhone を持つことで、GPS での管理、移動データロギングをする。リアルタイム検索は「友達を探す」機能で対象者が単独行動をする際の行動パターンを見られるようにする
- 昨年度までの段階で、①～③については、概ね習得することができていた。そこで、ここでは④についての状況を述べる。

### iPhone 導入・活用促進のための「旅行」の実行

対象者にとって、機器を活用するための必要感と必然性を高めるため、対象者と支援者、義姉の3人で、4回にわたって旅行をするように設定した。できるだけ自然に導入から活用へと進められるように配慮したためである。対象者は旅行やドライブなどの外出を非常に好むが、行き先は常に、行き慣れた数カ所の娯楽施設に限定されていた。そこで、この旅行では、あえて行き先を初めての場所に設定することで、意識を分散し、機器へのこだわりを回避するようにした。また、初めての場所であることから、「連絡の必要性がある」「居場所の確認の必要がある」「義姉の写真を撮ってその場で渡す」という、活用上の必要感をごく自然に印象付けることができた。

行き先の決定にあたっては義姉と意見を交わし、長い時間をかけてお互いに調整していた。ここでも対等の立場であることがよい影響を与えており、新たな行き先への興味・関心を高めていた。  
<エピソード①：行き先を決めるための義姉とのやりとり>

1～3回目までの旅行に関しては、義姉から行き先を提示し、対象者はそれに従う形であった。その際、義姉は、行き先の順番に書いて提示したり、iPhone を用いて写真や Map を提示して対象者に伝えていた。すると、4回目の旅行の前日に、対象者の方から義姉に希望の行き先を書いて提示し、お願いをするようになっていた。この変化には、家族全員が非常に驚かされた。これまでの義姉とのやりとりの中から、話し合いの際には、前もって下調べをしておいた方がよいこと、自分から行きたい場所などを提案すればよいこと、そして、具体的に提示をすればよいことなどを具体的に短期間で学ぶことができたということは驚きであった。一般的に、一定以上の年齢になった中年期の知的障害者は、新しいスキルを身につけることは難しいと言われているが、iPhone の活用というスキルを身につけたばかりか、それを通じて新しい「考え方」まで身につけていたからである。中年期であっても、新しい刺激を得ることの必要性を感じさせるエピソードであった。



早苗姉さんと崇兄ちゃん  
6月23日つれて行って下さい。  
1 竜門の滝  
2 白田のダイリ  
3 あ食事  
4 三連水車  
5 かも  
6 キタムラ  
よろしくお願いします。  
岡本英明

図2 義姉に行き先の希望を伝える様子

#### iPhone を活用した写真撮影と現像・プリント

H30 魔法のダイアリープロジェクトでの実践までで、写真撮影手段としての iPhone も比較的すんなりと受け入れることができた。使ううちに、フィルムカメラにはない「何枚でも撮影できる」というよさを実感していった。もともと対象者は、他の人が気にしないような様々な街中の物(信号機や街灯、建物の模様など)に強い興味を持っていた。しかし、フィルムカメラでは、撮影可能枚数が限定されるため、それらの物を撮影することをためらっていた。対象者のような興味の対象を持つ場合、デジタル保存のカメラは非常に相性が良いことに、自分で気づいていったようである。その利点を活かすため、さらに、プリントまでを行うようにした。プリントに際しては、フィルムカメラの場合、店員にフィルムをそのまま渡し、全ての写真を現像していた。デジタルの場合、現像することなく、店頭で機械を使ってその場でプリントすることが可能である。さらに、自分の気に入ったものだけを選択することも可能である。2回ほどこの行程を繰り返したところ、対象者はその仕方を理解することができた。さらに、直接店頭で機械で選択することができ、気に入ったものだけをプリントすることができる良さにも気づくことができた。



図3 DPE 店でプリント予約機を操作する様子

## <エピソード②：DPE 店での店員とのやりとり>

これまで、フィルムカメラの現像では、自分でDPE店に行き、フィルムを店員に手渡すことでプリントの注文を行っていた。デジタルでの注文は初めてのため戸惑っていたが、自分から店員に「お願いします」と声をかけていた。店員がプリントの仕方をひとつずつ教えてくれていた。デジタルのプリントのために複数回DPE店を訪れているが、毎回、わからない点について質問をすることができている。このDPE店は、長年利用しており、店員も対象者の状況をよく理解してくれているが、それでも、新たな課題（デジタルのプリント）が出現したことで、既知の店員とも新たな関わりが生じており、関わりの広がりを生むことができた。

### 導入後の様子

導入旅行の後、保護者との外出でも常にiPhoneを携帯し、連絡をするようになった。そのため、対象者が行きたいところに行っても、遠隔での見守りができるようになった。以前に比べて対象者はかなり自由に行動することができるようになった。また、カメラとしての導入についても良好であった。完全な移行へとは至っていないが、それはこだわりのためというよりは、例えば人物はフィルムカメラで、風景はデジタルでといったように、対象者自身で「ケースバイケース」で方法を選択できているためである。今後、デジタルへの完全移行の必要性が出た場合でも、比較的容易に行えるのではないかと考える。

## **実践2-2：連絡手段の精度向上と簡便性の向上のためのAppleWatchの導入**

### 導入した機器

- ・スマートウォッチ（Android）→AppleWatch

### 連絡手段の精度向上のためのAppleWatchの導入

家族との外出時は、必ずiPhoneを持つようになり、行動範囲も拡大できたが、呼び出し音やバイブレーションに気づけず、取り損なうことが何度かあった。通常の連絡であれば問題にならないが、緊急時では安全性の確保の面で課題がある。また、自由に行動してよい場合でも、時間の見通しが立たないために頻繁に通話をするなどし、自由度が下がっていた。そこで、

- ・時間・スケジュールの自己管理をすることで生活の見通しを持ち、ストレスを軽減する
- ・外出時のリマインド・タイマーとしての活用をすることで、約束の時間・場所の履行の精度を向上し、対象者と親の相互の負担を軽減する
- ・連絡手段としての精度を上げ、緊急時の備えとする

といったことを目指して、スマートウォッチを導入することとした。スマートウォッチの活用は、主には「バイブレーションによる着信通知」のために活用しているが、次第に「あらかじめ決めているスケジュールの定時での提示」や「TODOリストの提示」などを行うようにし、対象者の状況に応じて、少しずつ生活を支援できる機能を追加していく予定である。対象者は、これまでも腕時計を着用しており、それに対してこだわりも強かった。そこで、iPadの導入時と同様に、愛用している腕時計が故障したタイミングに合わせて導入することとした。また導入時は、義姉が、自分も同じスマートウォッチを使っていること、それを使うことですぐに電話に出ることができることなどを実演して見せた。そうすることで、非常にスムーズに導入をすることができた。

### 導入後の様子

スマートウォッチは、現時点では着信時のバイブレーション通知でのみ活用している。この導入に関しては、保護者が外出に連れて行った際にのみ行なっているため、まだ確実とは言えない部分がある。しかし、バイブレーションで通知を受け取って着信するという仕組みの理解

ができたため、着信時に正しく通話できる頻度は格段に向上した。

### 実践2-3：トラブル時の緊急の連絡をするための機器の活用

＜エピソード③：母親の体調不良時の様子＞

母親が心臓の発作のために倒れ、緊急通院する事態が発生した。緊急であったこと、母親が対応できない体調であったことから、対象者を一人で自宅に留守番をさせることになった。留守番事態には慣れているものの、他者の変化に非常に敏感で、異変を感じ取るとパニックになる傾向にある対象者の状況から、家族は非常に心配していた。1時間後に義姉が自宅に駆けつけたところ、特に慌てた様子もなく、自分で準備をして昼食をとっている最中であった。母親のことを尋ねると、平然と「母は病院ですよ」と答えた。

#### 緊急時の連絡の必要性

上記のエピソードから、対象者は、家族の予想に反して、非常時に非常に落ち着いて行動できることがわかった。パニックになったり、危険な行動をしたりすることはないと思われ、柔軟に対応することが期待される。両親ともに高齢であり、病気を抱えていることから、むしろ緊急連絡は対象者に頼るべきであると考えられる。今後のリスクヘッジの意味合いも含めて、機器の導入の具体化を図った。

#### 導入した機器

Amazon Echo Spot



図4 Amazon Echo Spot

緊急時対応の仕方を自動音声案内として、「アレクサ、助けて」を起動ワードとし、『119番への連絡』『兄への連絡』等の緊急時の対応の仕方を音声と画面で案内する仕組みを設定した。また、テレビ電話による緊急時ホットライン確立のため、カメラと画面を活用し、困った際のFace to Faceによる安心感を持てる会話手段の確保するようにした。音声操作によって実践者のもとにテレビ電話で発信できるように設定した。

### 今後の方向性

#### ① キャッシュレス決済への対応

近年、現金を使わない各種のキャッシュレス決済が一般的になっている。対象者は、常に多額の金額の現金を所持して行動しており、簡便性・安全性の観点から、現金を持たないことのメリットは多い。しかし、現時点ではキャッシュレス化はそこまで逼迫した課題とは考えていない。対象者自身が現金（効果や紙幣）自体にこだわりを持っており、所持することが安心の材料になっていること、キャッシュレスという仕組みが概念的に理解することが難しかったこと、当面現金での買い物ができなくなる状況にはならないであろうことが理由である。また今後、もしもキャッシュレスでなければ対応できない状況が現れた場合も、現在の対象者の機器への親和性の高さを鑑みれば、買い物・支払いの仕方自体は容易に習得できると思われる。

#### ② 緊急連絡

緊急連絡の設定については、実際の緊急事態でなければ発動することはない。また、未知の事態に対して不安感を抱きやすい対象者の状況を鑑みると、緊急連絡の仕方についてあまり事前に指導しすぎることはデメリットが多いと感じられる。しかし、「緊急時に対応する手段がある」ということ自体が両親の安心感につながっており、QOLを低下させる原因となる「将来的な漠然とした不安感」を減少させることができているため、有効であろうと考えている。